

悪神様の大悪行。或いは悪神様(笑)の日常

黒衣の詩人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

……では、我らの生を綴ろう。

神としては余りに短く、人としては余りに長い彼女の生を。

その物語はきつと苦難の連続だろう。しかし同時に笑顔溢れるものとなるだろう。故にきつと、面白くなると私は信じている……。

# 目次

プロローグ。或いは前置き | 1



# プロローグ。或いは前置き

別に彼女にしてみればどうでもよかった。

何でも出来てもなにも知らない彼女からしてみれば、何も無い空間を漂っているのが普通な彼女からしてみれば、今でも十分に満たされていた。

ただその時は何というか、魔が差してしまったのだった。



彼女が自分に似せて創った生物は、何故か彼女に似た力を持っていた。彼らが作ったものが少しずつ増えるのをみているだけで心が踊った。それに彼女は最初の創造でやる気がだいぶ無くなっていた。

彼らが彼女と同じように生物を作り、その生物が進化する様を見ていると彼女に欲が生まれ始めた。

その欲が『話してみたい』であったことが、彼女の転機であったことは本人すら知りたくないのだが。



彼女が欲を持ってまた時が過ぎた。この頃になると、彼女は自身の欲を我慢できなくなっていた。

そんなある日彼女は、ある赤子を見つけた。彼女が創った唯一の生物と同じ種族であつたことはある種の運命だつたのかもしれない。

赤子は衰弱しており、今にも消えそうであつた。

彼女はほんの躊躇も見せず、赤子の前に姿を現した。

そして彼女は、赤子を育てるための準備を始めた。



世界を見続けて知識があつたが、一部が抜けていてはいけなさと能力を使い赤子を育てるのに必要そうな知識を頭にインプットし、作業を始めた。

まず彼女は目の前に家を建てた。一階建ての必要最低限の物であつたが。

次に彼女が作ったのは多数のベビー用品であつた。オムツに始まりベッド、ベビー服におくるみなど多岐に渡つたので彼女が疲れたのでは、やる気が無くなつたのでは、と思う人もいるかもしれないが違つた。むしろ嬉々として世話を焼いたのである。

種族が神であつてもやはり夜泣きはあるし、食事も必要であつた。そして食事をすればもちろん排泄もする。が、それでも彼女は途中で投げ出さず、『アルヴィナ』と名付け、可愛がった。



そのうち、彼女に変化が見られるようになった。赤子に出会うまではいささか表情に乏しかった顔は、赤子が笑えば微笑むように。常に無関心さを示すように上がつていた目の端は、赤子への優しさを示すように少し垂れ、彼女の美しさに柔らかさが加わったり。少なくとも悪い変化は一切無かつた。

そして、彼女に変化が訪れるように、赤子も成長する。今にも消えそうだった存在感はどんどん強くなり、綺麗な紫髪は更に輝きを放ち、貫くような深紅の瞳は益々その鋭さを増し、将来美人になること間違いないのかわいらしい幼子へと成長を遂げた。

幼子が拙いながら話せるようになった頃、彼女は知識にあつた恒例行事、『ママ』と呼ぶ。『ママ』を敢行した。幼子の種族が神であり頭が良かったのか、驚く程あっさりとして呼ばれたのだつた。それでも彼女は、余りの感動に泣いてしまったのだが。



「ママ」と呼ばれ、彼女が泣いた日からまた幾ばくかの時が過ぎ、幼子は彼女に勉学を教えられていた。彼女が教鞭を取れるのは、例によつて能力のおかげであつたが。幼子は知識を次々吸収し、貪欲に知識を欲した。彼女は教えがいを感じ、次々と高度な知識を与えていった。

そうこうしているうちに、幼子は少女に成長を遂げた。以前より輝きと艶を増した髪を腰の辺りまで伸ばし、眼は貫くものから見通すものへと変化し、肌は色白であるものの悪い印象を与えず、寧ろ神秘的なまでの姿になつていた。

彼女は我が儘な部分もあつたが、素直で綺麗な心を持つ少女になつた。が、ここで問題が発生した。どうやら少女の種族は神は神でも悪神だつたのだ。今の性格ではいざ世に出たとしてもなめられてしまい、そこまでである可能性が高かつた。それを危惧した彼女からの指導、つまりは『目指せ悪神!』を掲げ、彼女から少女への演技指導である。

指導の成果もあつてか、なんとかなる程度にそれっぽくなつた少女は、遂に外の世界を見て回る事になるのだが、残念ながらそれは別の話。

言つていなかつたがこれは少女とその近辺の日常を綴る物語である。





「お母さん、何をしているのですか？」

「いや、ちよーつと今までにあつたことを文字に書き起こそうと思つてね。」

「そうなのですか。そうでした！　お母さん、少し付いてきてくれませんか？」

「えー面倒くさ……冗談だよ！だからそんな顔しないでよアルヴィナ!!」